

忠臣蔵と太平記

元禄十五年(1702)十二月十四日、大石内蔵助に率いられた赤穂浪士が吉良上野介義央を討ち、主君浅野内匠頭長矩の恨みを晴らした。浪士たち四十六人は翌年二月四日、幕府から全員切腹を命じられて果てる。事件の記憶がまだなまましいころ、こんな落書が、世人の口の端にのぼったという。

楠のいま大石となりにつけり

なほ(名を)も朽ちせぬ忠孝をなす

世間は事件直後から大石内蔵助を楠正成の生まれ変わりと感じていたらしい。近松門左衛門が「碁盤太平記」、二代目竹田出雲が「仮名手本忠臣蔵」で、幕府の目を避けるための赤穂事件の移し替え先に太平記の世界を選んだのも、内蔵助＝正成という世間の連想に便乗して受けをねらったと言ってよさそうだ。



仮名手本忠臣蔵の初演は、寛延元年(1748)の大坂道頓堀竹本座。主な登場人物で太平記にも顔を出すのは、足利尊氏の弟、副將軍の足利直義、尊氏執事の高師直、出雲守護の塩冶判官高貞、塩冶の妻(劇中の名は顔世)で、舞台は鎌倉だ。暦応元年(1338)、鶴岡八幡宮造営成就の式典に京都から下ってきた直義の接待を、塩冶高貞が高師直の指図下で担当するという設定で幕が開く。その際、越前で討死した新田義貞着用の兜を八幡宮に奉納することになり、女官時代、この兜の後醍醐天皇から義貞への下賜に関わった塩冶の妻顔世が鑑定に呼び出される。好色な師直はチャンスとばかり顔世に言い寄るが、袖にされる。それを恨んで接待の御殿に参上した高貞を遅刻を理由に罵倒する。こらえかねた高貞が塩冶に斬り付けたため、切腹を申し渡された。絶命寸前に駆け付けた国家老大星由良之助は、内心深く復讐を誓う。この大星由良之助が史実の大石内蔵助に当たるが、太平記に下敷きとなった人物は見当たらない。高師直が吉良上野介に擬されたのは、吉良氏が幕府の儀式をつかさどる高家だったところから、浅野内匠頭は赤穂の名産「塩」の縁で塩冶判官に結び付いたらしい。師直の横恋慕は太平記巻第二十一の「塩冶判官讒死事」を踏まえているが、判官切腹以後の段は太平記から離れた赤穂事件そのものの劇化となっている。



「仮名手本」では、徒然草の吉田兼好が師直の歌道師範、歌人で師直家臣の薬師寺公義が高貞に切腹を命じる幕府上使の一人として登場する。太平記によると師直は能書の聞こえ高い兼好に代筆させた恋文を使者に持たせて塩冶夫人に送った。使者は夫人が見もせず捨てた文を持ち帰ると、師直は怒って兼好を出入り禁止にする。これを聞いた家臣の薬師寺は主人に代わり「あなたのお手が触れた文と思うと捨てもおかれず・・・」という未練の和歌一首を作って届けさせた。すると夫人はそれを読んで顔を赤らめ、「重きが上の小夜衣」とつぶやいた、という。しかし、これは不倫を戒める新古今集の十戒歌からの引用で、夫人の真意は拒絶である。見かねたある女房が、素顔を見せたら嫌いになるだろうと思いつき、師直を手引きして夫人の湯上り姿を覗き見させた。これでかえって燃え上がった師直は、ついに高貞を亡き者にしようと決意、將軍に陰謀を企てていると讒言する。幕府の討伐を覚悟した高貞は本拠の出雲を目指し、自身は播磨路、妻は丹波路に分かれて、京都を出奔するが、幕府軍に追い詰められて自害した。



塩冶夫妻の最期について太平記は、夫人が途中で追討軍に囲まれ、家來の手で殺され、高貞は出雲に着くが妻の死を聞いて自害したとする。しかし、当時の北朝側の記録では、高貞は「陰謀が露見して暦応2年(1339)3月、播磨国影山宿で自害」としている。高貞が追討を受ける何らかの事件があったことは確かだが真相はわからない。一方、兼好と師直との間には文芸や有職故実をめぐってやり取りのあったことをうかがわせる記録がある。また、薬師寺公義がつれない女への艶歌を代作したことは彼の歌集にあるから、その依頼者が師直だった可能性は高い。仮名手本と太平記の接点としては、もう一つ見逃せないことがある。切腹を前にした高貞にこう言わせていることだ。「師直を討ち漏らせしその無念、骨髓に通って忘れ難し。湊川にて楠正成、最期の一念によって生を引くと言ひしごとく、生き変わり死に変わり、鬱憤晴らさで措くべきか」。この遺恨を引き継いで仇討ちを敢行した内蔵助の忠義と正成の忠義を重ねている。「仮名手本」の作者もまた、内蔵助を正成の生まれ変わりと思っていたのかもしれない。